

# 日常史・メディア・民衆自叙伝

——生活史記録集成とシリーズ『それでもって失われ行くことのないように』——

後藤 秀和

## はじめに

場所によってさまざまな呼び方があるものの、各国の近現代史研究に社会史、なかんずく日常史という分野が確立してもう二十年ほどになる。国家や大人物の活動に焦点を当てる政治史や経済史に民衆の生活を扱う社会史を対置させるような理解の仕方がすでに過去のものとなり、日常史やマイクロ史が「ミクロを研究するというよりは、むしろミクロレベルで、社会と文化の相互関連を研究の対象とする」<sup>(1)</sup>ものとして認識されるようになった。ある時代の文化と社会を理解するための基本的な手続きの一つとして日常史の分野はまだまだ発展の余地を残していると言えよう。

しかし八〇年代の日常史研究には、どの研究方法にもありがちなことではあるが、いわゆるブームとしての性格が伴っていた。さまざまなプロジェクトが行われた一方で、今日まで活動が継続しているものは少ない。<sup>(2)</sup>

本稿ではオーストリアで八〇年代より現在まで一貫して行われて

いる日常史研究プロジェクトとその担い手である研究機関「生活史資料集成 Dokumentation lebensgeschichtlicher Aufzeichnungen」<sup>(3)</sup>としてその最大の活動成果と言えるシリーズ『それでもって失われ行くことのないように Damit es nicht verlorengeht...』を紹介する。

このシリーズはお年寄りから投稿された自叙伝や日記、写真、回想その他の記録を、一部は単著の回想録として、また一部はテーマ別にまとめられた記録集のかたちで出版したものである。シリーズ第一巻の出版が一九八三年であったから、今年がちょうどシリーズ二十周年目に当たる。<sup>(4)</sup>五〇巻をこえてまだ継続刊行中である。

なぜ二十年もの長きにわたり民衆自叙伝の出版が続いたのか。当面の答えの一つは需要の問題から導き出される。シリーズ名にもあるように、かつての生活世界が日々「失われ行く verlorengeht」という実感がオーストリア民衆の中にあり、それを記録に留めおきたいという社会の要請がこうしたシリーズを生み出した。

他の西欧諸国においても生活史記録を収集する活動は行われてい

た。自伝的著作物を社会科学の題材として用いる伝統はポーランドからのアメリカ移民を研究したトーマス・ウィリアム・I・Thomas とツナニキ Florian Znaniecki の研究から始まったと言われているが、研究の担い手は主として社会学者や民俗学者であった。歴史学の側からのアプローチはこの二十年の間に展開しはじめたばかりなのである。ドイツ語圏において人々が自らの来歴を文字に記録するという現象自体、「ここ五、六百年の、より広い階層について言えばせいぜい二百年の」ものである。とりわけカトリックが支配的なオーストリアでは、ドイツの特にプロテスタントが支配的な地域と比較して農業的なミリューから自伝的著作が見つかることは非常に少なかった。<sup>(7)</sup>

自伝的著作物の存在ではドイツに対して遅れをとったオーストリアだが、継続的な収集と出版活動の側面ではリードしているといえるだろう。その理由をここで明らかにすることは筆者の能力を超えているが、一点指摘するならば過去へ向けられるまなざしの違いが挙げられる。ドイツでは過去を振り返ることが何よりもまずナチズムとの対峙というかたちをとった。振り返ることに抵抗のある「過去」を「克服」することが戦後の課題となっていたのである。<sup>(8)</sup>一方、オーストリア人の自己理解あるいは研究者の見解とは異なるものの、公的には「ナチス・ドイツの犠牲者」という立場で戦後の共和国体制をスタートさせた（あるいはさせられた）オーストリアにおいては、言い方は悪いが安易にノスタルジーに浸ることも可能であった。また別の要因として考えられるのは、オーストリアで第二次世界大戦以後まで残っていた伝統的農村生活スタイルの他の諸国との相

違である。その核をなしたのは農業奉公人および小屋住み人層の存在である。酪農中心のアルプス山脈地域（フォアアルベルク州は除く）および酪農比率の高い混合農業を営むアルプス前地からドナウ川流域にいたるまでの各州とも農民解放以後十九世紀・二十世紀を通して多くの奉公人を有していた。<sup>(9)</sup>

奉公人は、それが制度上廃止された後も、一九五〇年代半ばの農業の大規模な機械化まで実質的に残っていたと考えられる。こうした時間的には近いが感覚的には遠い過去が民衆自叙伝の読者の関心を集めることになったのだらう。

需要と供給のどちらかに分けられない要素も存在する。自叙伝著作の読者が作者になる場合がそれである。この点に関しては自叙伝収集活動そのものが問題となるため、本論の中で考察を加えよう。

本稿ではまず民衆自叙伝シリーズの成立前史について紹介する。ここでは学術研究と社会との関係についてオーストリア固有の状況が明らかになるであらう。次に同シリーズを利用する研究者の便宜を図るため、シリーズの内容と形式について概要を述べる。最後に自伝的著作物を学術研究に使用する上での問題点について数点指摘しよう。

## 1. シリーズ成立史

ウィーン大学経済社会史研究所はミヒャエル・ミッテラウアー Michael Mitterauer を中心にウィーン・グループと呼ばれる歴史家族研究者の多くをスタッフに抱え、これまでヨーロッパの家族史

研究をリードし続けてきた。<sup>(12)</sup> オーストリアで歴史家族研究が始まった一九七〇年代は主にカトリック教会の残した世帯調査簿などが利用され、家共同体の構造分析など歴史社会学的な研究方法がとられた。家族・世帯構造の国際比較が行われ、オーストリアの農村家族がヨーロッパの中でもかなり多くの奉公人を抱える地域として注目された。しかもそうした奉公人層が社会階層というよりは年齢階層として把握されるべきことが、オーストリア独自の史料である個人身分リストを利用した発展サイクル分析という研究方法で明らかに<sup>(13)</sup>なった。オーストリア農村の奉公人は多くの場合、十代半ば以降に奉公につき、一、二年毎に奉公先を替え、二十代後半に結婚によって奉公期を終えるというライフ・サイクルを送っていたのである。<sup>(14)</sup>

こうした成果は非常に画期的なものであったが、ヴィーン・グループの研究者たちはそうした歴史社会学的な方向性だけでは飽きたらず、一九八〇年代に入ると過去に生きた人々の心性を読み解くことを意図して歴史人類学的な手法を採用し始める。非血縁者が家の中に共住する世界で、人々は家を、家族を、そして世界をどのようにに把握していたのだろうか。そうした問いを発するようになったのである。こうした方向転換はフランスのアナール派やドイツの歴史家達にも見られるようにヨーロッパの歴史学界に共通した動きであったと言える。

方法の変化は史料の転換を伴った。まず民衆の遺稿調査が行われた。オーストリアにおける遺稿収集の現状把握は八〇年代に行われ、目録が作成された。ゲアハルト・レナー Gerhard Renner の手になる『オーストリア共和国の図書館・博物館における遺稿』<sup>(15)</sup>がその

手引書となっている。そこには国内二百十八の公共機関に収められた二千四百あまりの遺稿が挙がっている。ただしこの手引書はオーストリア国立図書館と演劇博物館の遺稿を含んでいない。また労働運動史協会が集めてきた社会民主党政治家などの四十の遺稿についても上記の手引書には含まれていない。一方、オーストリア国立文書館には軍関係者の遺稿を中心に千八百点ほどが集められている。<sup>(16)</sup>

### 『お年寄りが語る』オッタークリンク対話サークルと生涯教育

上記の手引書に挙げられたような、すでに集められた遺稿を利用する、というある種受動的な研究方法に代わって（あるいはそれに続いて）、八〇年代には別の新しい活動が生じた。積極的な同時代証言の収集、生活記録執筆の呼びかけである。そのスタートの一つが後に「オッタークリンク・モデル Model Outaging」と呼ばれるようになる対話サークルとその活動であろう。<sup>(17)</sup>一九八二年の夏学期、ヴィーン大学経済社会史研究所は農村地域における家族および日常生活の転換というテーマについて「お年寄りが語る／私は田舎から都市へやってきた」というある種のオーラル・ヒストリー・ゼミナールを設けた。オッタークリンクといえはヴィーン市西部、伝統的な労働者街区である。このゼミナールは市民大学あるいは生涯教育センターとも呼ぶべき場で行われた。そこで目指されたのは学生からお年寄りへの一方的なインタヴューではなく地方から都市へ移動してきた経験を持つお年寄りとの都市的生活スタイルしか経験したことのない学生との意見交換、世代間の接近である。学術機関としての経済社会史研究所と地域の生涯教育との結合が行われたわ

けである。

対話を繰り返している間に、お年寄りの家族内だけで読まれてきた手記の存在が明らかになった。その中で対話サークルに参加した一人の学生が親戚の生活史回想を発見する。その原稿は参加者の中で回覧された。「その原稿を読んだ人は皆、感銘を受けた。大都市に住む若者が今日では全く知るすべもない埋もれた世界が読者の前に立ち現れた。しかも学術研究書にはとうてい真似の出来ない瞭然さと迫力で、である。」<sup>(18)</sup>その原稿の著者こそシリーズの第一巻を飾った『九歳で奉公へ』のマリア・グレーメルであった。対話サークルの活動の中で、インタヴューという形式とは別にこうした文字による生活史記録を収集する必要性が強く認識されるようになる。

一九〇一年、住み込み人 *Inwohner* と呼ばれるような農村下層民の娘として生まれたマリア・グレーメルは一九一〇年に最初の奉公に就く。女性奉公人 *Magd* として十代から二十代の若者期を過ごした彼女は、一九七六年に自身の最初の三十年間を自分自身と子供や孫のために書き記し始める。執筆の第一の動機は「失われ行く過去」を家族のために残したいということであった。いわば個人的な目的で書かれたのである。それが対話サークルの活動の中でミッテラウアー研究者によって学術的意義を見いだされ、出版物として公にされたわけである。グレーメルの手記を出版するにあたってミッテラウアーは序文を付した。そこで彼は、個人的な生活記録が研究者にとっていかに得難く、また如何に価値が高いものであるかを力説し、家庭内に眠っている同様の記録を研究所に送付してもらうよう読者に呼びかけた。<sup>(19)</sup>

## マスメディアの利用…ラジオシリーズ「家族マガジン」

こうしてグレーメル的生活史記録を出版することで史料の掘り起こし作業が試みられたのだが、それだけでは読者からの多大な反響は期待できなかった。そこに別の角度からのアプローチが加わった。フランツ・R・ライター *Franz Richard Rader* 主導によるORFラジオシリーズの開始である。「オーストリア地域の家族マガジン」と題された番組に農村下層民出身の自叙伝著者たちが数週間おきに招かれた。<sup>(20)</sup>

出演者が農村の、それも下層の出身者だけに限られた理由をミッテラウアーは学問的な動機から説明している。彼は七〇年代、「オーストリアにおける十七世紀以降の家族構造の変化」という研究プロジェクトに従事していた。その研究で主たる史料となったのは前項でも触れた個人身分リストである。彼はこの個人身分リストを利用した研究の中で「予想だになかったほどの多くの、パウアーの下位に位置する住民集団」に出会う。その集団は「一方は僅かしか土地を持たぬホイスラーやコイシュラー（中略）などと呼ばれる人々、また他の一部は自身の耕地と住居を持たぬインヴォーナーやインロイテ（中略）などと呼ばれる人々であり、学術研究書ではほとんど触れられてこなかったグループ」であったと述べる。そのような「忘れられた集団」の研究こそ新しい「下からの歴史」にとって意味があると主張するのである。

「下からの歴史」に関しては朗読という要素も重要視される。番組では、グレーメルをはじめ自叙伝・生活史記録を執筆したお年寄り自身が朗読を行った。この意義についてミッテラウアーは以下の

ように述べる。

「朗読者と同じ社会階層出身の聴取者に対して、自分と同じ出自の人々が公利目的で文書をしたためている、という状況が示唆される。朗読者が話す内容は多くの聴取者の興味の的となっており、彼らが表現したいことを表現するのになんらかの必要としない、そうした境遇にあるのだと悟られる。自叙伝朗読は、生活回想録を書くように聴取者を刺激するには最良の方法だった。そこにこそこの番組の目的があったのだ。」

朗読後、ミッテラウアーら専門家サイドから、執筆者が朗読した内容を深化・一般化するための質問と解説が行われた。放送の最後には必ず聴取者に対して生活史記録の執筆や送付が呼びかけられた。その効果は絶大であった。このラジオシリーズとグレーメルの出版によってヴィーン大学経済社会史研究所に新設された生活史記録集成に多数の問い合わせがなされ、「二〇〇〇年春の時点で約千八百人の著者によるおよそ二千本の手記」が同記録集成に収められることとなった。

### 対話サークルのメンバー募集方法

こうした結びつきは国家からの援助によって可能になった側面がある。このラジオ放送は「メディア提携プログラム」と銘打たれた教育文化省の研究プロジェクトの枠内で行われたものであり、その延長として日常史やオーラルヒストリーに関わるいくつかの研究が出版されることになった。<sup>(25)</sup> いわば人文科学分野における官学の協働の成果である。このような日常史企画の実践について、メディア

との協働を意図した際のチェックリストがヴァッペルスハマーとヴェーバーによって作成されている。<sup>(26)</sup> そのリストを利用して日本において同様の研究方法の可能性を問うことも興味深い視点ではあるが、本稿の目的は自叙伝シリーズの成立過程を追うことにあるためあえて触れない。

ここで特記すべきことはこれらの活動が官・学だけでなく既存の民間諸サークルとの協力関係をも必要だと述べていることだろう。潜在的な生活史記録供給者としてのお年寄りをどのようにして動員するか。その問いに対する答えが既存の同好サークルなどを積極的に利用することに求められている点でヴィーン・グループの研究は画期的であるといえる。研究機関の肩肘の張った環境ではなく、同じような生活履歴を持つ人々に囲まれたいわば日常生活空間の中で回想行為が行われる。いわゆるインタヴュー式の調査では、聞き手と話し手の一対一関係がいくつかの問題を生み出す。例えば聞き手の調査目的に意識的にせよ無意識にせよ話し手側が合わせてしまうなどの状況がそれである。無論、多対多の対話サークルにおいても同様の問題が生じないわけではない。しかしそこに生じるプロセスは質的に異なったものとなる。

ある話者の語る内容について、聞き手（である若者）の側から一様ではない疑問や驚きが呈せられる。それを見た別の潜在的話者（であるお年寄り）はまず、話す価値がないと考えていた自明の事柄が興味の対象となりうることを看取する。また他の話者の語った内容が同世代の共通理解であったと主張された場合、そうした一般化に対して異議が唱えられることもあろう。お年寄り同士の気づき



〈写真1〉



〈写真2〉

あい、相互刺激の中で聞き手の側が想定していなかった新たな問題群が浮かび上がることも少なくない。日常史の研究プロジェクトがお年寄りの生活サイクルの中に含まれる「つきあいの場」において行われてきたことこそ生活史研究の継続性のいわば支柱となっていたのではあるまいか。

日本ではあまり注目されてこなかった官民学協働の対話サークルではあるが、自叙伝の収集・出版を可能にする執筆者層の掘り出しという面での貢献は大きい。

## 新聞メディアとの協力

民衆の生活史記録資料の保持者・執筆者の確保は新聞記事や新聞広告の利用によっても大いに進展した。単に研究所からの告知文が掲載されるのではない。新聞社の側が生活史記録の執筆者とその内容に対して写真入りで特集記事を組んでいるのである。日常史や「下からの歴史」が単に学界内部の流行ではなく、社会に受け入れられ、共有された運動であることを示していると言える。〈写真1〉は雑誌『フラウエン・ブラット Frauenblatt』のシリーズ第二巻を特集する記事、〈写真2〉はヴィーンの日刊紙『クリリア Kurier』の生活史記録特集である。

以上のようにさまざまなアプローチによって民衆の生活記録収集活動が強力なバックアップを受けた。「下からの歴史」は何よりもまず「下のための歴史」でなければならぬというミッテラウアーの方針に従って社会との協力関係が意識的に模索された結果、五〇巻を超えるシリーズの成功がもたらされたことは強調してもしすぎ

ということはないであろう。次章では経済社会史研究所生活史資料集成に寄せられ整理された二千以上の記録のうち出版されたものについて紹介する。

## 2. シリーズ『それでもって失われることのないように』

本シリーズは自筆かインタヴューによる聞き書きか、そして単著かテーマ別論集かという二つの要素で形式的に区分することが出来る。テーマによって「切り出され」た論集形式とは異なり、ある一人の生涯（あるいはその一時期）を扱う単著の回想録は書式の一貫性から比較的読みやすい。反面、研究者が望むテーマがその中で触れられているのかはわかりにくい。本稿の目的が自伝的記録利用の準備作業にあるため、紹介は単著に対してのみ行う。第一巻のマリア・グレーメルの著書をはじめ、シリーズ中二四巻が単一の著者による回想録となっている。

### 単著の内容と著者情報、テクストの生成過程

以下、単著となっている各巻に対して可能な限り①巻番号、②著者、③題名（絶版の情報）、④著者に関する情報（自筆かインタヴューか、執筆の時期・動機）、そして⑤扱われるテーマの順に記述する。絶版等で原著にアクセス出来なかった巻については著者情報とテーマの部分が欠けている。なお各巻のテーマとして挙げられているキーワードはあくまでオーストリア農村社会史を研究している筆者にとってのものである。

第一卷…マリア・グレーメル『九歳で奉公へ』同第二〇卷『農村から都市へ』<sup>(27)</sup>

一九〇一年に小屋住み人の家に生まれ一九三〇年までの農場奉公人として過ごした若者時代を、子孫に伝え残すために（研究所からの執筆呼びかけ以前に）執筆したのが第一巻。対象となる地域はニードーエスタライヒ南東部ブックリーゲン・ヴェルト。パウアーや奉公人の地位、戦争や政治変化の農村住民に対する影響などが論じられる。第二〇巻はマルクフェルトの大農場に移った後の一九三〇年から一九五〇年にかけての記録。大農場での共同農作業、機械化などが話題にのぼる。

#### 第四卷…マリア・ホーナー『ある産婆の生活から』<sup>(28)</sup>

第一次世界大戦中にケルンテン州に生まれる。マールクト（女性奉公人）を未婚の母とする。祖母も産婆であり、幼少よりこの職業に興味を持つ。シュタイアーマルク州都のグラーツにて技術習得後、一九四四年より本格的に自営助産婦として働く。一九八三年のラジオ放送の呼びかけに応じ、生活回想をクリスタ・ヘメルレに対して語った。その後、自身の息子に対して自筆で祖母及び自分の生活記録を書き残す。病院ではなく家で三千の新児を取りあげてきた豊富な経験から、さまざまな生活環境や家族関係、とりわけ農村における未婚の母とその子供の問題に焦点が当てられている。

#### 第六卷…バーバラ・ヴァス『我が父、材木奉公人・山岳農民』同<sup>(29)</sup>

#### 第一六巻『彼女にはいつもアルムがあるだけだった』<sup>(30)</sup>

著者はサルツブルク州ランマータール出身。第六巻では彼女自身ではなく彼女の父とそのおかれていた世界がテーマ。現代の若者世代には見せることの出来なくなつた過去を再構成したいという意図から書かれた。彼女の父は一九一二年生まれ。林業を中心とする標高約千メートルの山岳地帯で働いていた。彼女自身の記憶だけではなく、親類や同僚、友人との会話を通して父の世代のランマータールを描き出す。専門的なインタヴュー技術は習得していない。主題となるのは外界から隔絶された山での機械化前の労働環境と生活環境。作業用具から食生活、職業選択の可能性までが叙述される。第一六巻では彼女の祖母を主役と同様の手法で高地酪農地域におけるかつての労働世界が叙述されている。

#### 第八巻…レオ・シュスター『我々は何度も介入しなければならなかった』(絶版)<sup>(31)</sup>

モラヴィアにおける「ドイツ語の孤島」地域出身。一八八九年生まれで十四歳の時にヴィーンへ。二十一歳で徴兵され、第一次世界大戦が始まった二十五歳時点から職業軍人となる。第一次世界大戦終結とともにモラヴィアから追われ、オーストリア共和国へ。以後第二次世界大戦を超えて六十歳の退役まで地方警察官として共和国各地を移動（戦時中の一九四〇年はブラハにも駐屯）。自筆の回想を彼の娘が編纂したものであり、幼年期から退役までの時期が書かれている。「この出版物は父に対する生活回想を書き残して欲しいという私の再三の要求に父が譲歩したもの」だと娘のエルネステイ



ーネは言う。執筆時期は明示されていない。

三度の政治的变化（ハプスブルク君主国から共和国へ、ナチスドイツとの合邦、そして第二次世界大戦の敗戦）を経た彼の回想は「小さき歴史で大きな歴史の事実性を確認したり修正したりするためのものではなく、」職業軍人としてオーストリアに関わり続けた人物にとって、それらの政治変化がどのように内面化されたのかを示すものとして読まれる。換言すれば、国家ではなく民衆のレヴェルで「戦争」や「軍事生活」という過去がどのように構造化されているのか、その点において戦争の社会史という領域を広くカヴァーする可能性を秘めた回想録である。

第九巻：オズヴァルト・ズイント『Bulm und Gitschn "beinândo" is ka Zoug'l』（絶版）

イタリアとの国境近く、東ティロルのカリティツチュ出身の著者は一九〇〇年生まれ。同地で過ごした一九三〇年までの若者期について記録している。彼はもともと筆が立ち、ティロルの住民投票が行われた時点からすでにこうした記録を残していた。郷土の詩人として名を馳せていた点で、それまでの自伝的著作物とは性格が異なる。書きためられていた五〇〇ページに及ぶ原稿が生活史記録集成に送付されたがそのうち結婚までの最初の三十年が選択されて出版された。扱われている題材は東ティロルの労働慣習、食文化、学校生活そして第一次世界大戦。

第一〇巻：アドルフ・カッツェンバイサー『小ブツヒャーマン、

我が家へ急ぐ』（絶版）同第一五巻『蒸気とディーゼルの間で』（絶版）

第一〇巻はニーダーエスタライヒ州の農村における第二次大戦直後の生活記録。著者は自らの子供期にあたる一九四五年から五二年までを区切りとして、ヴァルトフィアテルに属する人口僅か二百人のヘルマン村の住民生活を叙述する。第一巻のグレーメルの自叙伝刊行を受けて農村の厳しい生活を文書に残したいと考えた彼は一九八五年に回想録を執筆。グレーメル同様、かつての世界を次世代に伝えることが最大の目的となっている。第一五巻では蒸気機関車の運転手という職業を選んだ著者が、少年の夢の職業として肯定的にイメージされがちなその仕事について現実のネガティヴな側面を叙述する。対象となる時期は一九五六から六五年。

第三三巻：アグネス・ボハンカ『私は草花を摘む』（絶版）

本シリーズ最初のオーラル・ヒストリーの手法を利用した生活史記録。ヴェルナー・ナッハバールガウアーのインタヴューによってヴィーンのとある市場で青物商を営む女性の出自と生涯とが明らかにされる。ボヘミア出身の彼女は失業を繰り返しながらようやく第二次世界大戦後になって母と同じ青物商に生業を定める。ハプスブルク君主国の各地からヴィーンに出てきた下層労働者の生活の一面が強いヴィーン訛りで現れる。

第一七巻：ヘレン・リースル・クラーク『旅は道連れ』（37）

インタヴューと自筆の混合形式。筆者は一九九七年ロシア生まれ

のユダヤ人を祖母に持つ。祖母の経験した旅について叙述する。そのほとんどが亡命である。インタヴューの部分にその都度、著者のコメントが付加される形式。著者はコペンハーゲン大学のスラブ学、マイノリティ研究者。一九〇五年にロシアからガリツィアへ、一九一四年の第一次大戦勃発でウィーンへ、そしてナチスドイツとの合邦でイングランドに移った波乱の生涯が専門的解説とともに叙述される。マイノリティの歴史、移民史そして女性史が主要なテーマとなっている。

第一八巻…バーバラ・パスルガー『堅いパン』<sup>(38)</sup>(絶版) 同二七巻『急斜面』<sup>(39)</sup>同四三巻『私の新しい生活』<sup>(40)</sup>

本シリーズでもっとも成功を収めた著者の一人に数えられるバーバラ・パスルガーは一九一〇年にサルツブルク州の山岳地帯フィルトモースで誕生。第一八巻では一九四六年の結婚までを区切りとしてダッハシュタイン連邦の麓の生活が語られる。インタヴュー形式。中心テーマは山岳農民、奉公人、結婚や隠居などに関する共同体規範。執筆のきっかけはラジオ放送による農村の生活史記録の執筆呼び掛け。

第二七巻は結婚から一九九〇年までの時期が扱われる。一部は自筆、一部はインタヴューの録音をもとに構成されている。一九八九年に第一八巻が刊行された後に執筆を開始。自筆部分が完成してからインタヴューが行われた。既に第一八巻の成功で地域の有名人となっており、講演なども行っている。そのような経験をふまえて執筆活動が行われたことに留意すべきであろう。二七巻のテーマは農

場における財産譲渡、インフラの整備とそれに伴う生活スタイルの急変、観光開発など。第四三巻は一九九〇年代「売れっ子」になった著者の山岳地域における新生活が題材に。経済的自立、余暇、観光などがテーマ。特に「生活史記録」と著者との関わりが豊富な講演経験とともに語られている点でシリーズ内では異色の作品。歴史家にとってではなく執筆者層たるお年寄りにとって、民衆自叙伝がいかなる意義を持つかについて考える場合、示唆に富む。

第二二巻…マリー・トート『つらい時代』<sup>(41)</sup>

一九〇四年生まれ。ニーダーエスタライヒ出身の女性煉瓦工。食と職が欠乏していた中でヴィクトール・アドラーに指揮された社会民主主義運動を直接体験。第二次大戦の合邦を女性としてまた母として経験する。安定と職業を獲得した戦後の生活を通じて「つらい時代」として過去を振り返る。都市労働者と政治運動、下層の女性が主題。

第三三巻…ルドミラ・ミゾティック『越境者』<sup>(42)</sup>(絶版)

一九二五年、私生児としてケルンテン州アイゼンカッペル付近に生まれ、第一次世界大戦でユーゴスラヴィアに割譲されたミースタールで育つ。戦争によってスロヴェニアとオーストリアとの間で揺れ動く農村小屋住み人の厳しい日常生活が描かれる。自筆。

第二六巻…ペーター・クラマー『よその農場で』<sup>(43)</sup>(絶版)

中学校教師で農場奉公人研究者である著者がまとめたサルツブル

ク州南部のルンガウの日常生活史。単著のかたちではあるがいわゆる自叙伝ではなく、最初に紹介した対話サークルのサルツブルク州版の研究成果報告である。山岳地域の養い子、奉公人、生活保護者の日常生活がテーマ。インタヴューテキストに別のタイプの史料群、例えば奉公人簿、生活保護者手帳、学級日誌、警察記録および自治体記録からの引用が組み合わされた、いわばミクロヒストリーの模範例となっている。

第三二巻…プリーフェ・フリートユンク『この世に樂園を望んでいただけ』<sup>(44)</sup>

ブコヴィナ出身の彼女は一九〇二年生まれ。二つの顔を持つ。一つはユダヤ人としての顔、もう一つは共産主義者。第一次大戦中十四歳でリンツに亡命、ブコヴィナに戻ると最初はシオニズム運動、後に共産主義運動に共鳴した。三〇年代に合邦で家を失いソ連へ、スターリン化でシベリアに一時抑留された後、一九四七年にヴィーンにもどる。テキストは自筆ではなく一九八七年から九〇年にかけて行われたインタヴューをフリートユンク自身が校閲して不足を補うかたちで生産された。また書簡も含まれている。著者がいかに動機づけられたかの問題であるが、この巻に限って言えば著者の自発的意志ではない。一九八七年に始まった経済社会史研究所のプロジェクト「オーストリアのユダヤ人」に先導されるかたちで研究者の側から申し込まれたインタヴューにフリートユンクが応じることで巻が成立したのである。よって研究テーマに引きずられた語りが行われている可能性を常に念頭に置いて読まねばならないだろう。ユ

ダヤ人問題を軸に戦争と亡命、共産主義、マイノリティ問題などがテーマとなっている。

第三三巻…ゲナーディ・E・カガン『昨日の世界—今日』<sup>(46)</sup>

ユダヤ系ロシア人のドイツ文学者でシュテファン・ツヴァイク翻訳家の自叙伝。サンクト・ペテルスブルクでドイツ語を学ぶ。ソ連邦の崩壊後、ヴィーンに移住。シリーズ上初めての文学者の自伝。政治家など大人物の自伝への偏りを是正するために下層民に光を当てた企画であるが、九〇年代半ばに入り、逆に下層民衆への偏りを是正する必要があることが出てきたことの表れでもある。著者の生年に関する記述なし。文学、政治、移住が主要テーマとなっている。

第三九巻…アゴタ・バルトニカイテーサヴィキエネ『巨大な森のはざまの村』<sup>(47)</sup>

リトアニア女性の回想。学校教育が浸透していなかった世紀転換期のリトアニアの一村落について、独学で読み書きを身につけた著者の視点から叙述される。

第四〇巻…マリア・シュスター『陽の当たらない場所』<sup>(48)</sup>  
九巻『仕事は一年中あった』<sup>(49)</sup>

サルツブルク州の山岳地方ルンガウに一九一五年に生まれた著者の自筆回想録。父の死後、母が再婚した時点より彼女は、はじめは子供として、後には奉公人として働くことになった。再婚によって起こった農場での呼び名の変化から一九二〇年代、三〇年代の山岳

農民家共同体における家族観、人的結合関係をかき見ることができ。自らの当初の著作に満足しなかった著者は九三年から九五年の間に原稿の書き直しを行い、視点の転換を図った。それが四九巻である。こちらは男女役割分業および休日、食生活、宗教などにおける山岳共同体特有の慣習を回想の主題としている。

#### 第四一巻…アンナ・ハルトマン『あるヴィーン女性の回想』<sup>(50)</sup>

著者は一八二七年から一九〇七年までヴィーンで生きていた女性。その孫であるエリカ・フレミッヒが祖母の手記を研究所に委託する。もともとの原稿は二部構成で一部はアンナ・ハルトマンの祖母と母の世代がテーマ。一七二五年から一八四八年の革命までのヴィーンの市民女性が描かれる。二部は自分の子供時代とボヘミア出身の夫がテーマ。合わせて三百四十枚の原稿を一冊四部構成にまとめたおしものが本書である。十九世紀の市民生活。

#### 第四五巻…ルードヴィヒ・フンダー『我が遍歴時代』<sup>(51)</sup>

十九世紀にグラーツで生まれた菓子職人の遍歴記録。それを著者の孫が研究所に委託。扱われている時代は一九六二年から六九年。詩的表現をふんだんに使用し、菓子修行と花嫁さがしの旅を叙述する。移動範囲はオランダを含む東中欧ヨーロッパとロンドン。

#### 第四七巻…ギンター・ドゥベック『そのうちわかる』<sup>(52)</sup>

著者は一九二八年にヴィーンに生まれる。一九三〇年代と四〇年代のヴィーン郊外における子供の生活を一九九〇年代に回想して自

筆で記録した。すなわちオーストロ・ファシズムとナチ体制の時代がテーマとなっている。いわゆる戦争世代の著作。

#### テーマ別の論集

シリーズにはある個別の執筆者が自身でテーマを選択するタイプとは別に、研究者がある一つのテーマを設定し、複数の著者から生活史記録あるいはその一部分を集めるタイプのものがある。この種の回想録集について前節と同様の内容紹介をする紙幅はない。これらのタイプはほとんどの場合タイトルあるいは副題によってテーマが明らかになっているため、表1に示した。ここで注意しなければならぬのはテーマ別論集であってもその編纂のされ方は各巻ごとに異なる点である。特に編纂された時期によって大きく二つのタイプに分けられる。

生活史記録集成は当初、主に農村下層出身の人々に対して特にテーマを定めずに記録の委託や新たな執筆を呼びかけた。その中で経済社会史研究所のメンバーがプロジェクトなどにそって共通の内容を含む記録を選別したり、複数の記録の中から同じ要素、たとえば奉公人として働いていた時期の叙述を抜粋する形式で編纂したのが一つのタイプである。奉公人や小屋住み人（ホイスラー）、養子などをテーマとした、三巻や五巻、一九巻、二八巻などが代表的なものだ。

その後、生活史記録集成の活動のプロセスにおいて恒常的に執筆者陣を確保する戦略が採られる。すなわち生活史記録集成に原稿を送った経験を持つお年寄りに対して手紙によるコンタクトをとり続

表1 テーマ別論集リスト

巻	編者	書名	副題	出版年	収録 本数
2	ミヒャエル・ミッテラウアー編	苦難を背負って	三人の女性の生涯	1984	3
3	テレーゼ・ヴェーバー編	ホイスラーの子供時代	自伝的物語	1984	25
5	テレーゼ・ヴェーバー編	女性奉公人	農村奉公人期の生活回想	1985	18
7	エファ・テザー編	ベンチに手を	学校の思い出	1985	15
11	ヴィクトリア・アーノルド編	「電灯がついた日」	電化の記憶	1986	59
12	シュネラー/シュテックル編	「それは安全な世界だった」	君主国及び共和国における市民の子供時代	1999*	10
19	ノルベルト・オルトマイア編	男性奉公人	自叙伝資料と社会史的概観	1992	3
21	エアハルト・シュヴォイカ編	祖母たち	孫たちの回想	1992	14
24	クリスタ・ヘメルレ編	第一次世界大戦下の子供		1993	24
25	ハインツ・ブラウマイスター/エファ・ブリムリンガー編	毎年また…	帝政期と高度経済成長期のクリスマス	1993	33
26	ペーター・クラマー編	よその農場で	山岳地域における養子、奉公人そして生活保護者	1992	12
28	エファ・ツイス編	養い子		1994	14
29	エファ・ヤンツェン/メルト・ニーフス編	学級日誌	1932年から1976年までのある一世代の女性年代記	1994	16
30	パウラ・ヴォサリコワ編	遍歴で	ボヘミアの手工業職人たちの回想	1994	19
33	ヤナ・ロソヴァ編	ボヘミアとモラビアの子供		1996	20
34	ユルゲン・エールマン編	食卓にあがったものは食べられてしまった	飲食の歴史	1995	23
35	クリスティナ・ボボヴァ編	「赤と白の撚り糸」	バルカンの若者	1996	10
36	エアハルト・シュヴォイカ/ヤナ・ロソヴァ編	祖父たち	孫たちの回想	1997	19
37	パウラ・ヴォサリコワ編	当局の指示により	ハプスブルク君主国官僚たちの回想	1998	10
38	ゲルト・ドレッセル/ギュンター・ミュラー編	1916年生まれ	ある世代の伝記	1996	9
42	ペーター・グッチュナー編	「そう、大人になったらわかることだ」	都市と農村の労働者の子供時代	1998	24
44	ハネス・シュテックル編	「お嬢様」と「良家の子弟」	君主国および共和国における中産階級の若者期	1999	13
46	ドロテア・ムテスィウス編	「声がみな台無しだ」	日常生活における音楽の記憶	2001	60
48	ルーベルト・マリア・ショイレ編	懺悔	20世紀のカトリック悔悛実践に関する自伝的証言	2001	46
50	クルト・パウアー編	運転の魅力	自転車、オートバイ、自動車の途上で	2003	46
51	ハネス・グランディツ/カール・カーザー編	「涙の梨の木」	旧ユーゴスラヴィアからの生活史記録	2003	17

\*第二版

け、催しの案内を行ったり、他の執筆者の書いたものを紹介して論じあったりする一種の文通サークルが形成された。お年寄り同士の議論の中で浮上してきた新たな視角をきっかけに研究所側からテーマを指定して関係者に執筆を依頼する方法がとられるようになる。特に世紀が変わってから刊行された日常生活における音楽をテーマとする第四六巻、教会における懺悔という従来国外研究者には近寄り難かった民衆の宗教生活を主題とする第四八巻、自転車や自動車の運転に関わる回想を集めた第五〇巻などはそのような二つ目のタイプに属する。

どちらの場合においても生活史記録集成が定めた著者および内容に関する情報が各記録の最初に付与されており、編纂された各記録の成立過程について一定程度知ることが出来る。また、テーマ別論集はほとんどの場合、専門家による解題が付随する。扱われているテーマは日常生活史に限らない。農業、移民、家族構造、世代、民族など関連分野への導入論文としても価値の高いものとなっている。

### 3. 民衆自叙伝の歴史研究への利用と問題点

前章で自叙伝著者の出自と執筆動機について記載したのはそれらの情報が自叙伝を歴史学の素材として使う場合の問題点に直結しているからである。史料批判の方法、歴史家の研究方法に対する意識に関わる民衆自叙伝特有の問題を最後に論じてみたい。

筆者がこの間追求してきたのは奉公人という存在、奉公人を含み

込むオーストリア農村社会をどのように考えるかということである。そうした観点から奉公人を経験した人々の生活史記録に出会ったのだが、それでは我々歴史研究者は彼女らや彼らの証言をどのように取り扱えば良いのだろうか。

#### 奉公期はつらい時代？

ここにシリーズ第五巻『女性奉公人』に収録されたアンナ・シュタルツァーの生活回想から一節引用する。

苦労はあれども奉公人であるというのは良い職業だった。野外で働き、協力し合って仕事を済ませ、時には楽しく休む。快適な奉公先には何年もの長きにわたって奉公人たちが居座るものだ。そのような奉公先があこうものなら、ひっきりなしにそのパウアーに問い合わせがくる。優秀な奉公人は結婚相手としても引く手あまただった。一九五〇年代になると奉公人という地位は存在しなくなった。馬はトラクターに、手作業は機械にとってかわった。今となっては馬もクネヒト(男性奉公人)も存在しない。<sup>(83)</sup>

奉公人に対しても奉公先たる農場に対してもきわめて肯定的な証言である。さて、この証言はどのように読むべきか。本当に奉公人は「良い職業」だったのだろうか。

同一の巻に収められたアンナ・ズィーベンハンドゥルの書き出しはシュタルツァーの回想とは完全に異なる。

奉公人であること、それはすなわち途方もなく多くの義務を負うことだ。その義務にはハウスに対して誠実であり連帯感を

持ち、仕事に喜びを感じることが含まれる。<sup>(54)</sup>

奉公人を法制史料の側面から研究する場合、奉公人の雇用主への服従が強調され、不自由な身分であると結論されることが多い。文書史料を利用した伝統的なスタイルの研究成果に対して、例えばシユタルツァーの証言を用いて修正や反証を行ったりズイーベンハントゥルの回想をもって結論を強化したりすることができようか。それには留保が必要である。それぞれの証言は別個の生成過程を持つ。どのような経歴を持った人物が、誰を対象に、何を目的として記録したのか。シユタルツァーは奉公を終えた後、出身家族の農場を相続し経営者となった。その後都市に移ることがなかった。一方、シリーズに収められている回想の多くは農村から都市に移った人々のものであることは成立史で触れた。必要なのは生活履歴がどのように著者の現在の世界観を規定しているのかを問うことである。都市生活文化を受容した人々はその移動という選択とそれによって生じた現在の生活に肯定的な意味を付与させるため、農村生活期を「つらい時代」として記述する傾向がある。一方、生活サイクルの中で奉公人を経験したが最終的には農業経営者となったシユタルツァーは奉公人期を自身のライフサイクルの中で連続的にとらえる。奉公は自身が経営する農業家共同体を支えた制度でもあるため肯定的な評価が下される。各回想に付与されている執筆者の履歴と執筆の動機はそのような推論を可能にする。

過去を否定的に述べる回想録のみを集めて、それを奉公人が抑圧された存在であることの証言として利用するのは誤りである。同時に、就職先を選択している証言を含む回想録のみを利用して、奉公

人が「自由」であったとすることもまた正しいとは言えないだろう。誰が語るのか、誰の声を聞くのか

前述した例は「誰がいつ、誰に対して、何のためにそれを語ったのか」という史料批判的な基礎作業の重要性を示している。そして生活史記録集成はその情報を出来る限り付与するようつとめている。著者の来歴と現在の生活条件、動機付けなどから我々は、それぞれの著者の過去に対するまなざしのバイアスを認識することが可能になる。しかしこのことで自叙伝史料を利用するための準備は十分整ったと言えるか。

歴史学そのものが孕んでいる問題でもあるが、歴史家の過去に対する選択的な関わり方がより強く自覚されねばならない。ミッテラウアーによって農村下層出身者が主要な執筆者層として「選択された」生活史記録集は八〇年代という時代においては意味があった。すなわち人口比では大きな位置を占めながらもそれまで研究対象として触れられてこなかった農村下層民に光を当てたことが、ハプスブルク家や偉大な政治家、オーストリアの輝かしい文化（無論狭義の）、領内の多民族とその民族運動などを「選択的に」叙述してきたオーストリアの歴史学のあり方に新たな視角を提供したのだ。

前章で紹介したように自叙伝がいかに書かれたかは意識的に記録されてきた。しかし誰に聞くのか、つまり生活史記録の著者群がどのように調達されたのかについてはこれまであまり問題化されてこなかった。本稿でシリーズの成立過程をやや詳細に論じた意味はここにある。すなわち歴史学が日常史という視角を用意し、新たな史

料として民衆の手になる生活史記録を用いようと決断したこと、その際に現在では残っていない過去の生活文化（とりわけ農村の文化）を背負った人々を執筆者として想定したこと、それらが各自叙伝と日常史・生活史に関わる歴史叙述にどのようなかたちで影響を及ぼしたのかを生み出した歴史家自身が考えねばならない時期に来ているだろう。

誰が語るのか、すなわち生活史記録がいかにして書かれたかに話を戻そう。実はここにも史料批判的な方法を発展させる余地がある。第一章で論じた生活史対話サークルの活動やラジオ放送に影響を受けて執筆を決意した人々は個人の記憶をどのように叙述してしまうだろうか。サークル内でのお年寄り同士の話し合いでは苦難の時代の記憶が個別性よりも共通性を強化するかたちで語られる。そのことは若者を交えた対話でより強まる。現代の生活文化との違いに興味を持つ参加者の期待に応えるべく、お年寄りの記憶が「集合化」されていくのである。歴史家が自叙伝を利用する際、安易な一般化は避けようと常に努力するものではあるが、既に自叙伝として書かれる前から現代の文脈に合わせた記憶の編集作業が執筆者層の中で行われている可能性があることにも注意しなければならない。

## 何を語らないか

民衆自叙伝の著者について論じるためには、書かれた自叙伝を使うしかない。「偉大な」人物が自叙伝を残した場合であれば、著者が書かなかったことが何か、そして書くことを避けた理由は何かを別の種類の史料を用いて論じることが可能になる。しかし民衆自叙

伝はそこに書かれている生活履歴でもって執筆者の生涯を逆照射しなければならない。例えば一九三〇年から第二次大戦までを扱った多くの自叙伝には、その時間的になめらかに連続した叙述の中で、ナチス・ドイツとの合邦に全く触れていないものがある。そうした要素から著者の過去に対するまなざしが明らかに。記憶の隠蔽を行いつつ「かつて」を語る著者の「いま」が明らかに、そのことがテクストの読みを助けるのだ。

## 結びにかえて

以上のように、ある一定の枠組みの中で生み出された民衆の生活史記録は、史料として利用するためにさまざまな準備作業が必要となる。しかし従来の方法では明らかにならなかったある時代の生活文化や規範、国家観、共同体の編成、家族構造、アイデンティティなどの諸問題に切り込む力を民衆自叙伝は確かに持っている。

それでも基本的に民衆自叙伝は別のタイプの史料と組み合わせる用いられるべきだとの認識が支配的である。今のところ、自叙伝を単独の史料として用いた研究はオーストリアにおいて生まれていない。ヴィーン・グループにおいてもそれまでの研究方法を補助するものとして扱われてきた。<sup>(56)</sup>

しかし歴史叙述と歴史学のあり方が変化している現在、生活史記録に新たな意義が見いだされる可能性も十分にある。例えば民衆自叙伝を記憶の生産と消費という視点から考えることが出来るだろう。このシリーズが継続していること自体、人々に「記憶の生産」への関わり方について新たな準拠枠を提示している。またそれぞれの自



叙伝が繰り返し言及されることによって、それまで継承され再生産されてきた社会的記憶、集合的記憶が変成するかもしれない。「記憶の場」が問題となる現代の歴史学において民衆自叙伝が持つ重要性はさらに大きくなる。自叙伝史料をめぐる新たな視点や方法論の確立を自らの課題としつつ、生活史料集成の今後の収集刊行活動に注目して行こう。

## 注

- (1) 矢野久、アンゼラム・ファウスト編『ドイツ社会史』有斐閣、二〇〇一年、Vページ。
- (2) ドイツ語圏で出版された自叙伝シリーズに限れば、本稿で紹介したもの他に、オーストリアのナチ期における抵抗運動関係者の自叙伝シリーズ『文化・現代史のための伝記テキスト』(一九八四年創刊、全一五巻で一九九四年完結)、スイス民俗学協会の編纂による『民俗学手帳』(一九九三年創刊、二〇〇三年現在で三三巻まで刊行)、『近代の自己証言』(二〇〇三年現在で二二巻まで刊行)などがある。Verein Kritische Sozialwissenschaft und Bildung (Hg.), *Biografische Texte zur Kultur- und Zeitgeschichte*, Wien, 1984-1994; Paul Huger (Hg.), *Das volksculturelle Taschenbuch*, Zürich 1993-2003. (このホームページを参照) 二〇〇三年一〇月現在。http://www.limmatverlag.ch/; Hartmut Lehmann, Alf Lüdtke, Hans Medick, Jan Peters und Rudolf Vierhaus (Hg.), *Selbstzeugnisse der Neuzeit. Quellen und Darstellungen zur Sozial- und Erfahrungsgeschichte*, Berlin 1993-1997 (Bd. 1-6), Wien-Köln-Weimar 1999-2003 (Bd. 7-12)
- (3) 以下で論じられる自叙伝シリーズ『それでも、失われ行くことのないように』は二〇〇三年九月現在で五一巻まで発行されているが、そのうち一四巻分が絶版となっている(一部は新版での発行予定あり)。内容紹介にあたって既刊分の大部分は学習院大学文学部史料学科所蔵の版を利用した。絶版のものについてはヴィーン大学経済社会史研究所の生活史記録集成「ユンター・ミューラー氏の」(厚意により同研究所のものを利用させていただいた。また氏は生活史記録集成の活動に関するインタビューにも快く応じてくださった。併せて感謝する。
- (4) 二〇〇三年十月現在シリーズ二十周年を記念してマリア・グレーメル(二冊の既刊自叙伝を一冊にまとめた記念版が出版されている。Maria Gremel, *Mein Leben*, Wien-Köln-Weimar, 2003.
- (5) Günter Müller, *Sammlungen autobiographischer Materialien in Österreich*, in: Thomas Winkelbauer (Hg.), *Vom Lebenslauf zur Biographie. Geschichte, Quellen und Problem der historischen Biographie und Autobiographie* (Schriftenreihe des Waldviertler Heimatbundes 40), Horn-Waldhofen an der Thaya 2000, S. 169-204, hier, S. 170. — マストンナヒキの原著 William I. Thomas/ Florian Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, New York 1919-1921. 以下については著者未見。ミューラーの同論文脚註参照。
- (6) Ebenda, S. 169.
- (7) Ebenda. 同論文著者のミューラーは二〇〇三年九月四日に筆者が氏に對して行ったインタヴューの中で、カトリック地域で自叙伝著作が書かれなかった理由について以下のような推論を行っている。プロテスタント地域が聖書を教会から個々人の手に「取り戻す」ことを意図していた一方で、カトリック教会側により聖書を読むこと、すなわち民衆が直接文字に触れることに対する規制が行われた。そのため書き記すという行為が社会的上層に特権化されたのだという。この指摘は書物をめぐる文化史を宗教的規範という視点から考える上で示唆に富む。
- (8) 成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系ドイツ史』第三巻、山川出版社、一九九七年、四二二ページ以下。
- (9) 近藤孝弘『自国史の行方』名古屋大学出版会、二〇〇一年、三四ページ

ジ以下。

- (10) オーストリアの国家統計からオルトマイアが算出した数字を挙げる。  
一九〇二年時の農林業従事人口は、394,403人、そのうち328,140人(83.53%)が奉公人、一九三〇年時点では、706,538人の農林業従事者のうち246,897人(34.9%)が奉公人であった。

Norbert Ortmayr, Sozialhistorische Skizzen zur Geschichte des ländlichen Gesindes in Österreich. in: ders. (Hg.), *Knechte: Autobiographische Dokumente und sozialhistorische Skizzen*, Wien-Köln-Weimar 1992, S. 297-376, hier, 358-361.

- (11) 森明子「土地を読みかえる家族：オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌」新曜社、一九九九年、七四ページ。

- (12) ヴィーン・グループについては若尾祐司による二つの整理を参照。若尾祐司「ドイツ語圏の歴史家族研究とヴィーン・グループ」ミヒャエル・ミッテラウアー、ラインハルト・ジッター著、若尾祐司、若尾典子訳『ヨーロッパ家族社会史』名古屋大学出版会、一九九三年、一八九～二五ページ、同「ドイツ語圏の家族史研究」同編『家族』ミネルヴァ書房、一九九八年、二六六～二七八ページ。

- (13) 発展サイクル分析についてはMichael Mitterauer/Reinhard Sieder, *The Developmental Process of Domestic Groups: Problems of Reconstruction and Possibilities of Interpretation*, in: *Journal of Family History* 4, 1979, を参照。

- (14) オーストリアの農村奉公人には大きく分けて三つの型がある。①二目は婚姻と新たな世帯の創設でもって終了する若者期のみを奉公人として過ごす「生活サイクル奉公人」『*Lebenszyklischer Gesinde*』二二目は婚姻と新世帯設立が一生涯許されない生涯奉公人『*lebenslanger Gesinde*』三二目は領主の農場内で婚姻・配偶者と共住する大農場奉公人『*Gutsnotgesinde*』である。オルトマイアの整理に依れば、生活サイクル奉公人がオーストリアでもっとも多く見られるタイプである。一方、生涯奉公人はケ

ルンテン州など一部の地域で経済危機に対応するかたちで一時的に成立した例外現象だという。三二目の大農場奉公人は現在の大ブルゲンラント州にあたる地域のみで見られる。ブルゲンラントは一九世紀前半まで粗放的の畜業しか行われていなかったが、一八六六年の鉄道建設によってハンガリーが国際的な穀物供給地帯となったことで本格的な入植が始まった。アウスグライヒ以降、一九二二年までハンガリーに属していたため封建的な大土地所有制の影響が強べ二二目にとめる奉公人はいわば小作人の地位であつたといふ。

- (15) Gerhard Renner, *Die Nachlassse in den Bibliotheken und Museen der Republik Österreich*, Wien-Köln-Weimar, 1993.

- (16) 遺稿収集に関してはミッテラウアーによる整理に全面的に依拠している。Müller, a. a. O., S. 171-173.

- (17) 以下に述べる対話サークルの成立に関しては主としてヴィーン大学経済社会史研究所生活史記録集のホームページに依拠。(ページは二〇〇三年十月現在のもの)  
<http://www.univie.ac.at/Wirtschaftsgeschichte/Doku/langtext.html>

- (18) Maria Gremel, *Mit neun Jahren im Dienst. Mein Leben im Stadel und am Bauernhof 1900-1930*, 2. Aufl., Wien-Köln, 1991, S. 7.

- (19) Ebernd, S. 9-10.

- (20) Michael Mitterauer, „Aber arm wollte ich nicht sein“ Ein Rundfunkprojekt über die Lebensverhältnisse ländlicher Unterschichten (以下 Rundfunkprojekt と略す), in: Hubert Ch. Ehalt (Hg.), *Geschichte von unten: Fragestellungen, Methoden und Projekte einer Geschichte des Alltags*, Wien-Köln-Graz, 1984, S. 143-161, hier, S. 144

- (21) 従来「農民」と訳られてきた「*Bauer*」という語があるが、この語には「ある農村家共同体において、子供を含む従属労働力に配置される、家父長的権威と責務を持つ自立した農場経営者」というニュアンスが含まれる。よってあえて「*Bauer*」と表記する。以下を参照。森明子、前掲

書「二六ページ以下。後藤秀和「一八七四年オーバーエスタライヒ奉公人令と州議会における審議」『学術院大学文学部研究年報』第四八輯、六三ページ。

(22) Mitterauer, Rundfunkprojekt, S. 145.

(23) Ebenda, S. 148-149.

(24) 前掲生活史記録集成ホームページ。(二〇〇三年十月現在)  
<http://www.univie.ac.at/Wirtschaftsgeschichte/Doku/bestand.html>

(25) 「メディア提携プログラム」の成果として以下。Elisabeth Wapelschammer / Therese Weber, *Auch Lebensgeschichte ist Geschichte: Ein Leitfaden für autobiographisches Erzählen und Schreiben*. Wien 1985; Gitta Stagl, *Alltagsgeschichte: Möglichkeiten und Grenzen der Arbeit mit Lebensgeschichte*. Wien 1989.

(26) 以下に引用するヴァッセルスハマーとウェーバーのリストでは既存の民間諸団体との協力が暗黙の前提となっていて、ことがわかる。Wapelschammer / Weber, a. O., S. 10.

「ある対話サークルなどの催事をメディアと提携して宣伝する前に必ず要事項を全て考慮したかどうか以下のチェックリストで確認せよ。

・どの研究所が開催場所の提供と、場合によっては参加者勧誘の協力を行ってくれるのか。

・現存するどの協会(女性クラブ、コーラスサークル、郷土研究協会など)に相談することが出来るか。

・どのような資金調達の可能性はあるか。

・参加者はどのような予想を私(たち)の提案に結びつけて考えているか(参加者の社会的、地域的、世界観上の所属)。

・催しの枠組み部分における条件はどのようなべきか(コピー、ケーキ、席順、カセットレコーダー等々)。

・日程はいつが良いか(地域の年金生活者クラブや各協会の日程など)。

・時間帯はどこが好都合か(一人で来たり遠距離を通ってくるようなお年寄

りに対しては午後の時間帯)。

・会合の頻度はどうあるべきか(月に二回あるいは毎週)。

・どのような設備が使用可能か(カセットレコーダー、スライド映写機、現物投影機など)。

・参加者勧誘の方法は(チラシ、雑誌記事、ラジオ、口頭宣伝、各協会の催事プログラム)。

・どのような組織がある場合、どの組織などの業務を管轄するのか。

・取り組むべきテーマは何か。(傍線引用者)

(27) Maria Gremel, *Vom Land zur Stadt. Lebenserinnerungen 1930-1950*. Wien-Köln, 1991.

(28) Maria Horner, *Aus dem Leben einer Hebamme*. Wien-Köln-Weimar, 1994.

(29) Barbara Waß, *Mein Vater, Holznacht und Bergbauer*. Wien-Köln, 1989.

(30) Dieselbe, *„Für sie gab es immer nur die Alm...“ Aus dem Leben einer Sennlerin*. Wien-Köln-Weimar, 1994.

(31) Leo Schuster, „... Und immer wieder mußten wir einschreiten.“ *Ein Leben „im Dienst der Ordnung“*. Wien, 1986.

(32) Ebenda, S. 4.

(33) Oswald Sint, *„Bußm und Gitschn beindnd is ka Zoig“ Jugend in Osttirol 1900-1930*. Wien, 1986. 方言のため題名は訳出できなかった。

(34) Adolf Katzenbeisser, *„Kleiner Puchermann lauf heim“ Kindheit im Walbertal 1945-1952*. Wien, 1986.

(35) Dieselbe, *„Zwischen Dampf und Diesel“ Meine Ausbildung zum Lokführer*. Wien-Köln-Graz, 1988.

(36) Agnes Pohanka, *„Ich nehm' die Blüten und die Stengel...“* Wien, 1987.

(37) Helen Liesl Krägl, *„Man hat nicht gebraucht keine Reisege-*

- selfschaft...". Wien-Köln-Weimar, 1992.
- (65) Barbara Passruger, *Hartes Brot. Aus dem Leben einer Bergbäuerin*, Wien-Köln, 1989.
- (66) Dieselbe, *Steier Hang*, Wien-Köln-Weimar, 1993.
- (67) Dieselbe, *Mein neues Leben*, Wien-Köln-Weimar, 1998.
- (68) Maria Toth, *Schwere Zeiten. Aus dem Leben einer Zieglarbeiterin*, Wien-Köln-Weimar, 1992.
- (69) Ludmilla Misotić, *Die Grenzgängerin. Ein Leben zwischen Österreich und Slowenien*, Wien-Köln-Weimar, 1992.
- (70) Peter Klammer, *Auf fremden Höhen. Anstiftkinder, Dienstboten und Einlieger im Gebirge*, Wien-Köln-Weimar, 1992.
- (71) Privé Friedjung, „Wir wollten nur das Paradies auf Erden“ *Die Erinnerungen einer jüdischen Kommunistin aus der Bukowina*, Wien-Köln-Weimar, 1995.
- (72) Ebenda, S. 17.
- (73) Gennadi E. Kagan, *Die Welt von gestern-heute. Erinnerungen eines russisch-jüdischen Germanisten*, Wien-Köln-Weimar, 1995.
- (74) Agota Bartnykaite-Savickienė, „Ein Dorf zwischen großen Wäldern“ *Erinnerungen aus dem alten Litauen*, Wien, 1996.
- (75) Maria Schuster, *Auf der Schatzseite*, Wien-Köln-Weimar, 1997.
- (76) Dieselbe, *Arbeit gab's das ganze Jahr. Vom Leben auf einem Lunger Bergbauernhof*, Wien-Köln-Weimar, 2001.
- (77) Anna Hartmann, *Erinnerungen einer alten Wienerin*, Wien-Köln-Weimar, 1998.
- (78) Ludwig Funder, *Aus meinem Burschenleben. Gesellenuwanderung und Brautwerbung eines Grazer Zuckerbäckers 1862–1869*, Wien-Köln-Weimar, 2000.
- (79) Günther Doubek, „Du wirst das später verstehen...“ *Eine Vorstadt-Kindheit im Wien der dreißiger Jahre*, Wien-Köln-Weimar, 2003.
- (80) Therese Weber (Hg.), *Magda. Lebenserinnerungen an die Dienstbotin bei Bauern*, Wien-Köln-Weimar, 1991, S. 117.
- (81) Ebenda, S. 79.
- (82) 上の並びオーラル・ヒストリーのインタヴュー手法は自叙伝とは別力を発揮する。オーラル・ヒストリーの方法に関してはギール・ヤンブレン著「酒井順子訳『記憶から歴史へ』青木書店、二〇〇二年参照。
- (83) 数値化されたデータと民衆自叙伝史料を組み合わせた研究として以下がとりわけ重要。ミハエル・ミッテラウアー「アルプス地方の奉公人生活」同著「若尾・服部他訳『歴史人類学の家族研究』新曜社、一九九四年、二七二ページ以下。
- (84) 記憶をめぐる歴史学の方法については近年研究が増えている。なかでもノラの翻訳が刊行されたことは特筆すべきだろう。ビエール・ノラ著「谷川稔監訳『記憶の場』全三巻」岩波書店、二〇〇二年